

送風管と取瓶



●コレクション・データ

時代 弥生時代中～後期

調査 上：送風管 唐古・鍵遺跡

第40次調査

下：取瓶 唐古・鍵遺跡

第61次調査他

発見年 上：1990年／下：1996年

大きさ 上：復元長約50cm、管径6.0cm

下：高さ22.4cm、復元口径28.5

cm

今回紹介する送風管と取瓶は、青銅器を鑄造する道具の一つです。唐古・鍵遺跡では、銅鐸の石製鑄型や土製鑄型の外枠などが多数出土しており、銅鐸をつくるムラとして注目されていますが、その鑄造技術に関わる重要な遺物になるのが今回の道具です。

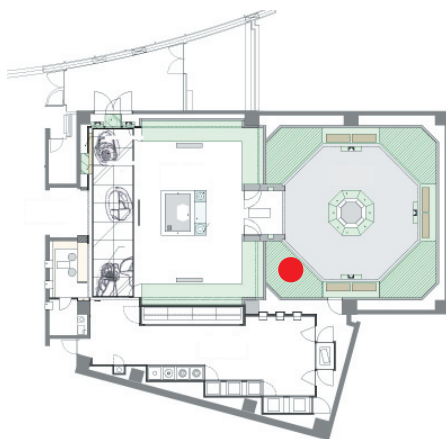
送風管は鞆ふしによる風を炉に送るための土製の管です。先端が「曲状」になるものと「直状」になるものがあります。曲状になるものが炉内に突っ込まれるもので、曲状の先端が高熱により変色しています。この曲状送風管の後端には直状送風管が数本接続され、さらに鞆本体に接続されることとなります。弥生時代の鞆の構造は不明ですが、他の民族例では、皮鞆がありますから、同様なものが想定できそうです。

この曲状送風管の先端の被熱状況は、1〜2センチ前後で他の部分はほとんど被熱していないことから、この先端部分のみが高熱にさらされる状

況であったことを示しています。露天の炉であれば、送風管全体が被熱すると考えられることから、炉壁をもつ熔解炉のような構造で、その壁から送風管の先端だけが炉内にあつたことが想定できそうです。

一方、取瓶とは、溶けた青銅を鑄型に注ぐための器で、唐古・鍵遺跡では坏部の側面に注口をもつ高坏形の土製品を想定しています。ただし、この高坏形土製品は、この器内で青銅を溶かす「坩堝るつぼ」説もありますが、前述の送風管の状況から溶解炉を想定することで、この土製品は取瓶説に傾きます。

弥生時代の鑄型や青銅器は、近畿・北部九州を中心に多数出土しているにもかかわらず、それに関連する道具類は案外少ないのが実情です。そのなかで、唐古・鍵遺跡の送風管と取瓶は、弥生時代の青銅器鑄造技術を解明できる重要な資料になっています。



ミュージアム上面図と展示位置